

キャリア教育の現在、 現場での課題

キャリア教育の過去と現在

——高等学校でキャリア教育・進路指導を
されている中で、ここ最近気になることな
どはありますか。

千葉 直近では、2016年卒の大学
生等に対する企業の採用活動が後ろ倒
しになり、選考が8月になります。が、
その時期は高校生の就職活動では、応
募前職場見学会があるんです。大企業
は職場見学と大学等の採用に人を配分
することもできるのでしようけれども、
中小企業だとそれほどの余裕がなく、
今年の8月になってから重なっている
ことに気づいて焦ってしまうのではな
いかと心配しているところですね。今
年は企業がどういった採用計画を立て
ているのか。企業も高校も、できるだけ
混乱がないように予測的に動いて対応
するのがカギですね。高校生にとって
は、夏休み中に職場見学ができること
が有難いんですよ。それが後になれば
なるほど授業に影響してしまいます。

——大学進学率が5割を超すまでになっ
てきた過程で、どのような変化を感じられま
したでしょうか。

社会、産業が変わっていくことを知り、 生涯にわたって学び続けること

長年高校教育に携わり、キャリア教育のさまざまな推進・普及活動に関わっ
てこられた都立晴海総合高校教諭・キャリアカウンセラーの千葉先生に、
いまの現場の課題等についてうかがった。

東京都立晴海総合高等学校 教諭／キャリアカウンセラー
全国高等学校進路指導協議会 事務局長

千葉吉裕氏に聞く

千葉 企業にとって高校生と大学生を
比べると、育てがいがあるし、賃金ペー
スで言っても高校生を採用したほうが
いいですよ。大学生はいたずらに4年
間歳とつるだけの人も多い。

高校生の就職・進学の動向について
はいろいろなファクターがあります。
過去には、リーマンショックの影響で
「就職したいんだけども内定が取れ
ないから進学する」という生徒もいま
したが、今年なんかは就職状況が非常
にいいので、進学に流れる数は今まで
に減っています。そもそも進学は
コストが高い。4年間で何百万と払わ
なければなりませんし、都市に大学
が集中しますから、地方の子は来ら
れないですよ。奨学金もらって進学す
るとしてもかなりの借金ですから、今
は卒業後に収入がどれくらい得られる
か見通しが立たないし、そのままでは
大学に行く？ ということです。以前
は大学出れば就職できたし、大卒者の
賃金ベースもよかったです。今はそ
ういう時代ではありません。

社会では教育全体が「生涯学習」に
移っています。キャリア教育は生涯学
習の一環です。高校で得た知識を基に



さらに生涯にわたって学び続けていく
人間を育てよう、というのが今の教育
の方向です。学んだことが将来、社会
に生きるということを見せながら、だ
から今一生懸命やってる勉強の意味が
あるし、そのことが楽しいと感じさせ
るのがキャリア教育ですよ。

——例えば進学校などでは、相変わらずい
ま一つキャリア教育の必要性が認識されて
いない面があるような気がします。

千葉 生徒たちはその後の社会につな
がってるといふ感覚をもたないで勉
強してるとすよ。ただ大学に入れ
ばいいというくらいの勉強でしかなく
て、モチベーションも上がらないし、
とにかく大学に入学してしまえば何と
かなるくらいにしか思っていない。だ
から使えない人間になってしまふ。

日本では、70年代くらいからあんな
り外に目を向けない教育になってきた
んです。安倍閣議なんかで学生がデ
モしたりバリケード張ったりしていた
時代まではある程度外に目が向いて
いた。学生が一人ひとり背伸びしなが
らも一生懸命考えて、何かを発言して
いた。その後、共通一次が導入されて一
気に受験勉強だけをさせるような人間
を作り始めるんですよ。学校の中だけ、
お勉強だけやってほしいと言ったた
教育。それがここに来てもっと社会を
見なくちゃだめだという方向に戻して
いるのがキャリア教育ですね。

本来のキャリア教育

千葉 社会もどこか大学出れば企業
のほうで面倒見ますよという時代だっ
た。でも今は、企業で若手社員に対す
る研修をしなくなりました。

企業側からの「キャリア教育をやったほしい」というのは、新人教育みたいな意味なんですよ。

キャリア教育という言葉にみんなが反応するようになったのは、企業の人材育成のやり方が大きく変わってきたからでしょう。80年代に日本の企業は、効率的な運営のために企業内研修と適正配置に力を入れてきましたが、今それをやらなくなると、職種別採用に変わり、はじめからできることを求めて採用する形になっている。

「キャリア教育」が、結局企業としては人材育成の部分を学校でやってもらいたいというニーズから来ていたりする。「キャリア教育」は、論じる人それぞれの立場で違って、文科省の「職業的・社会的自立を目指した教育をしていく」という本来のところになかなかなくてこないですね。

キャリア教育は、「働くこと」自身を理解する面もあります。給料をもらう、稼ぎを得る、ということは何か代価を出すことであるわけですから、自分はそのために人が働いている場を見に行かなければいけない。自分のや



りたい仕事のところである必要はないんです。「サービス」にしても相手の求めているものをうまく提供することによって代金が出てくる、世の中ってこういうふうに成り立っているということ。体験を通じてその感覚に気づき、理解する。

単に行くだけみたいな結果にならないように、事前・事後の学習、言葉がけをどういうふうにするかに工夫が必要ですよ。「やらされてる感」満載で行っちゃうともうだめですね。自ら進んでやるっていうふうに変わらない限りはうまくいかない。

未来を考え、社会の変化を知る

——意欲の乏しい生徒、なかなかモチベーションの上からない生徒に対する意欲喚起意識づけに苦労されている先生も多いかと思うのですが、どのように対応すればよいでしょうか。

千葉 「未来」を考えられる動物は人間しかない。将来を見通して未来の自己像を考えさせることが大切です。まず「やりたいこと探し」ですね。自分が将来どういうふうになるかと考えるために、いろんな本を読んでみる、いろんな人の話を聞く、体験してみる、そこで成長意欲が湧いてくる。「もっとうるさなことが出来るようになる」とか「こういう力を得てそれを活用できるようにしよう」と思ってくる、だんだん歯車が勝手に回っていきます。現実的な夢を考えさせる、目標を立てさせるといことが大事だと思います。

ただ、親が思うイメージどおりやろうとすると、しくじる。「いい学校に

行きさえすれば人生は安泰だよ」みたいなことを言われ、わけもなく勉強だけしているという感じ。社会は基本的に知識を活用していく場ですから、今やっている勉強が社会につながっていることが意識づけできれば、今の勉強もがんばれるし、それを将来にわたって生かしていくこともできるわけですよ。

ね。そういうことも学習指導要領にきちんと記されていますが、そこにいろんなバイアスをかける人たちがいるんです。受験産業は自分たちの利益誘導のために「これ勉強すれば有名大学入れますから」と言う。でも、有名大学に入れば何とかなるわけではない。

産業構造の変化を保護者なんかは知らないんですよ。相変わらず女子生徒は事務職希望が多い。親は女性が働いて欲しいという事務職のイメージもっているんです。親がそういう価値観の押しつけをしている。いまやこれだけOA化され、事務職はそんなに必要なくなっていくので、時代が変わっているのに、その変化を理解していない。

大学入試のためではない学びを

千葉 学習意欲をいかに喚起するかに苦労するのは、大学入試を基にしたがら学習させるといやり方をしてきた先生が多いからでしょう。今これだけ簡単に大学に入るとなると、勉強しなくてもいいという話になる。でも、大学に入るのが目標ではない。それをちゃんと理解して生涯にわたって学び続ける人を育てるとい感じにはまだなりきらないですよ。高校の先生も高校生も、本質的に「学ぶ」という

ことは何なのかということですよ。

昔は大学入試がきっかけ、モチベーションの一つになり得た。それがなり得なくなるといのは昔から言われ続けてきて、内発的な動機づけに切り替えていこうとずーっと試みてきたわけですよ。別に新しい話でもないんです。

社会の変化が激しすぎるということもあります。5年後の東京オリンピックも大きいんですよ。外国人が大量に来る。お金をどんどん落ととしてくれる。仕事はたくさんある。それがオリンピックが終わった瞬間に雇用がなくなりますからね。それを想定しながら勉強してきた子たちと、ただ闇雲に大学行けばいいでしようくらいに思ってた子たちとは大きな差が出ちゃう。

求められる人材も明らかに違ってきます。サービス産業化の流れもありますし、外国人に対応できる、語学ができるだけでなくリーダースhipをとれたり異文化の人たちと交流できるようになることが求められてくる。

サービス系は、これからは必ず増えてきますが、それに対応できるようにはまだなっていない。産業構造や雇用環境の変化を高校生、保護者がきちんと理解したうえで、今やっている勉強が将来の役に立つんだという、そういうところの意識改革が課題になってくると思います。昔にこだわってれば、「自分が希望する事務職がない」という話で収まってしまうわけですよ。

変化に向けてちゃんと準備している子はスムーズにテイクオフできるんだし、うけけれども、そうじゃない子は一気に厳しい状況に追い込まれてしまうということになります。

職業研究